

みんなで考えよう。
人が人らしく生きるために…

養老町人権擁護推進大会 ～ 中村 雄一さんの講演より ～

令和7年12月6日(土)に町中央公民館中ホールにて、養老町人権擁護推進大会を開催しました。講師には、NPO法人なかよし学園プロジェクトの理事長であり、イギリス国王の居城・ウィンザー城や、ニューヨークの国際連合本部でも講演された経験をもつ中村雄一さんをお招きし、「子どもと共に未来をつくる人権教育」を演題にお話しいただきました。世界各地で復興支援などに携わり、多くの子どもたちと関わってこられた中村さんの講演から、印象に残った内容を紹介します。

報道されない世界の実情

「笑顔や痛みを分かち合って共に生きる」。この言葉が、講演の中で最も心に残りました。戦争で家族を亡くし、地雷で手足を失い、少年兵として生きたそこで生活している人の声に直接触れてきた経験があるからこそ、現地での活動の空気が伝わり、そばにいて分かち合うことを大切にされている人なのだと感じました。中村さんは、定時制高校の教員として教育に携わるかわら、東日本大震災の被災地でボランティア授業や学習支援活動を行ってこられました。

そこで喜んでもらえた経験が、現在、世界各地で行っている復興支援活動などのきっかけとなっているそうです。そんな中村さんは世界中で教育支援を行う中で、戦争を経験されます。

コンゴ民主共和国で中村さんが見たのは、子どもよりも先に大きな家具を持って避難する大人の姿です。その結果、160人もの子どもが現在も行方が分からない状況にあるそうです。

私は、最も尊ばれるはずの命より、大きな家具が優先されているという事実が衝撃を受けました。もしかすると、そこには、何か事情があるのかもかもしれません。しかし、どのような状況にあっても、命より優先されるものがあってはならないと思うのです。私は、中村さんのその後の実践から同じ思いを胸に活動されているように感じました。

中村さんは、命が大切にされる社会をつくるために、今、自分に何ができるのかを考え、復興支援の一環として授業を行います。元少年兵だった子どもたちにミニ四駆を使ったものづくりを通して、「壊す力」ではなく「生み出す力」を。お面を使い、心(感情)を顔に表し、笑顔になることを伝え

ます。授業を通して子どもたちは、自分の知らなかった世界に触れ、「同じ」を見いだしていきます。学ぶことで「知らないこと」や「違い」が、他者への恐れや攻撃を生み、やがて戦争につながる可能性があります。一方で、「知ることは視野を広げ、「同じ」を見つけることが優しさにつながる。中村さんは、日本では身近に感じるものの少ない戦争という経験を味わった子どもたちと直接触れ合い、笑顔や痛みを分かち合う体験をとおして、「学ぶこと」の本質についても私たちに示してくださいましたように感じました。

共に生きる

なかよし学園の写真集には、次のような言葉が記されています。

——戦争で家族を殺された人、貧困で勉強する環境がない人、そんな状況にある人々と出逢った。僕らが生きているこの世界で、僕らが知らない世界の片隅で赤ん坊が殺され、地雷で手足を失い、戦争や災害で大切なものを全て失った人がいる。家族を殺された、地雷で手足を失った、少年兵として生きてきたトモダチに出逢って、悲しみに触れ、「他

人事」が「自分事」に変わった。僕らは何ができるのだろうか？それは「教育」。様々な学びが人々を笑顔にした。彼らを一瞬でも笑顔にしたい。何度でも笑顔にしたい。身の回りのちょっとしたこと、知らなくても済むけど知ると人生がちよっと明るくなる、それが学ぶということ。いろんな世界を知ること僕らの人生はもっともっと豊かになる。もっともっと優しくなれる。学ぶことで僕らは知る。みんな「同じ」なんだ、と——

私たちは違う道を歩いても、同じ地球という大地に立ち、共に生きる人間です。それぞれの幸せの基準が違っていても、かけがえのない存在であることに変わりありません。

中村さんのように、世界を舞台に活動することは簡単ではありません。しかし、共に生きるために私たちができることは、決して特別なことではないはずです。身近な人たちに思いを寄せ、その人のことを知ろうとすること。そしてそばに寄り添い、「あなた一人ではない」と笑顔や痛みを分かち合おうとすること。その小さな積み重ねが、共に生きるという営みをかたちづくるのではないのでしょうか。